

何を引用ととらえるか

—— 日本語学の立場から ——

一 はじめに

本稿の目的は、何を「引用」ととらえるかという本質的な問題について、日本語学の立場から考察を加えることである。

日本語の「引用表現」を形式の上からとらえる際の一般常識的な目安は、表記上引用符（「」）が付けられていること、引用の助詞「と」が現れていること、「言う」を代表とする発言内容を示す動詞が用いられていること、等ではないかと思われる。しかし、もちろん、日本語学で扱うべき「引用」の問題はそれにとどまるものではない。「引用」とはどのような行為を言うのか、引用行為に先立つ事実との関係はどうか、といった原理的な問題から、引用と非引用を分ける言語表現上の徴表は何か、いわゆる「話法」と「引用」とはどのように違うのか、「引用表現」にはどのようなバリエーションがあるのか、といった表現上の問題まで、扱うべき範囲は広い。

このように日本語学で扱うべき「引用」の領域は広いにもか

松 木 正 恵

わらず、この分野に関する研究は歴史が浅いと言わざるを得ない。本格的に議論されるようになってまだ二〇年ほどしか経っておらず、最近になってようやく体系的な著作が世に出てきたところである。その原因の一つは、「引用」が、「古人の言や他人の文章・言葉を引き」「文学作品・先行文献等の一部を説明のために引いて用いる」の意味であまりに常識的なため、改まって「引用とは何か」について日本語学的に問い直す機会が少なかったことにあるのではないかと思われる。また、「他人の言葉を引く」とからすぐに直接話法・間接話法が連想されるが、日本語の場合は英語などと違い両者を区別する確固とした形態上の徴表がないため、研究対象とされにくかったということもあるかもしれない。

本稿では、日本語学的な立場から引用の本質を探るために、重要と思われる先行研究のいくつかに言及しながら、私見をまじえて考察を進めていくことにする。

二 「再現」と「アイコン記号」

引用研究で最初に言及したいのは、藤田保幸氏の研究である。

藤田氏は、一九八〇年代前半から精力的に研究を進め、これまでに引用関係の論文を五十編近く発表しているが、その中の主要なものを体系的にまとめ直した大著が藤田（二〇〇〇）である。⁽¹⁾ 藤田氏の特徴は、日本語の引用表現を文法論の問題として意味・統語的に考究することを目指し、それまでの、どちらかというと表現論・文法論的なレベルにあった、話法中心の引用研究とは一線を画す立場に立つことである。氏の引用論は、「引用のシンタクス（シンタグマティクなコトバの関係性の問題）」「タテの引用論」と「話法（パラダイグマティクな対立の問題）」「ヨコの引用論」の二方向に展開しているが、本節では、前者の領域から引用の本質にかかわる部分のみを取り上げて述べていきたい。

氏はまず、日常的・常識的な「引用」概念と文法論の対象となる「引用」の差異を明らかにすることから始める。その上で記号論的な見方を導入し、引用表現の本質を追究しているが、藤田（二〇〇〇）の定義（二五頁）によると、統語論で問題となる「引用」とは、

所与と見なされるコトバを再現して示そうという意図・姿勢で用いられる引用されたコトバの表現であり、引用されたコトバが、引用（＝再現）されたものという表現性に基づく意味・文法的性格に拠って、文の構成に参与しているもの、それを含む構造。

である。常識的な引用のイメージは、他から既存のことばを引いてくることだが、文法論では「所与と見なされ」さえすれば、実際に発せられてはいないことばであつても引用することができると考える。そのため、発話動詞に限らず思考動詞も引用構文を形成でき（例①）、たとえ未実現を表す形式が付加していても引用構文と見なされる（例②）。

① 花子はその頃、来月仕事をやめようと思っていた。

② 太郎は僕がやった方がいいと言っだろう。

つまり、統語的な引用とは、「そのようなコトバが本当にあろうとなかろうと、それを所与のものとする姿勢でとり上げて、再現したらしく見せる（また、解される）表現（二七頁）」なのである。⁽²⁾ また、「再現」するとは「同一性に基づいて同等のものを差し出す（一〇頁）」意で、この点により「パロディ」や「もじり」とは区別される。なぜなら、これらは同等ではなく近似したものを示すことで、その差異から生じる効果を期待する表現だからである。さらに「再現」は、文の構成要素のどんなレベルまでも可能で、単語の一部から文全体、感動詞・終助詞といったムードや音素的要素まで取り込めるのである。

次に、「引用（＝再現）されたものという表現性」とは、表現対象を抽象化・一般化して示す通常の言語記号（シンボル・象徴記号）とは異なる表現性である。表現対象を言語記号で抽象化して示す代わりに同等の実物を差し出して伝達行為を行う「実物表示」⁽³⁾ という方法があるが、引用されたコトバは、ことばではありながら一種の実物表示であり、記号論的にはアイコン記号（類似記

号・類像」に位置づけられる。従つて、

③ *あした行つた、に公園、私だけ、一人よ。

④ メアリーは片言で「あした行つた、に公園、私だけ、一人よ。」と説明した。

のように、地の文として日本語の文構成規則を逸脱した例③は非文法的であるのに対し、同じ表現を、引用されたコトバとして文中に取り込んだ例④は何ら問題がない。地の文と引用されたコトバには、言語記号としての質の差があるためである。また、引用されたコトバは、様々な構成要素として文中に取り込まれたり、単独で一文を構成したりもする。

⑤ 女性の声で「きゃあ、助けて！」が聞こえてきた。

⑥ 突然の「きゃあ、助けて！」にはびっくりしたよ。

⑦ 「きゃあ、助けて！」の声にはびっくりしたよ。

⑧ ちょうどその時、女性が交番に飛び込んできて「きゃあ、助けて！」

⑨ 「手を挙げろ！」「きゃあ、助けて！」

例⑤は主格補語的、例⑥は対格補語的かつ被連体修飾語的、例⑦は「の」を伴つて連体修飾語的、例⑧は述語（用言）的、例⑨は独立した一文である。このように、引用されたコトバが様々な統語的機能を担えるのも、ひとえにそれらが「第一義的に行爲・出来事を表わすアイコン記号（五九頁）」であり、一定の品詞性を持つ通常の言語記号とは違って、文中における分布に応じて相対的に品詞的役割を付与されると見られるからである。これが、先の定義の最後の部分「引用（Ⅱ再現）されたものという表現性に基づ

く意味・文法的性格に拠つて、文の構成に参与している」の意味するところと言えよう。

三 引用符の機能と統語的引用

ところで、引用符（「」）の有無と統語的引用との関係はどうだろうか。例⑤、⑧のように、引用されたコトバが様々な構成要素として文中に分布している場合には、引用符がないと引用であることがわからず不自然であり、そのままでは文として成立しない。しかし、引用符があるからといって、必ずしも統語的引用の範疇に入るといってもいい。

⑩ 「頭から湯気を出して怒った先生」の声にはびっくりしたよ。

の場合、引用符の有無は文成立自体には直接関係しない。つまり、例⑦と違って引用符をはずしても統語的に支障はないし、文意もほとんど変わらないのである。これは、藤田氏の言葉を借りれば、「傍線部の文構成要素としての働き・性格が、この部分が引用されたコトバと解し得ることに依拠するものではない（二三頁）」からである。この場合の引用符は、傍線部をアイコン記号として提示しはするが、そのことが文全体の構造や解釈に何ら特別な影響を与えていない。単に既存のことばを再利用したことを示しているに過ぎず、一般的な引用のイメージとは重なるかもしれないが、統語的引用の問題とは考えられない。

むしろ、統語的引用を明示しているのは引用の助詞「と」である。例①・②・④のように助詞「と」がある場合には、引用符の

有無にかかわらず引用であることがわかり、文としても問題なく成立するからである。また、引用符があれば直接話法に決まる傾向はあるが、引用符がない場合でも直接・間接両方に読める可能性があることから、引用符の有無が話法の別を見分ける決め手とも言い難い。ただ、例①・②の場合、引用符があれば、

① 花子はその頃、「来月仕事をやめよう」と思っていた。

② 太郎は「僕がやった方がいい」と言うだろう。

の傍線部はアイコン記号として提示される（直接話法読み）。従って、その傍線部を引用されたコトバと解せることになり、そのことによって傍線部の文構成要素としての働き・性格が決まってくる。つまりこの場合、例①の「来月」は思考時点「その頃」の翌月を、例②の「僕」は「太郎」を指すというように、文中のダイクシス要素の指示内容が決定されるわけである。ちなみに、引用符がない場合（間接話法読み）には、例①の「来月」は全文の発話時点の翌月を、例②の「僕」は全文の話し手を指す、と大幅に解釈が異なる。このようなことから、例①・②は例⑩と違って統語的引用の範疇に属する問題と言えるのである。

まとめると、引用を明示する構造上の手がかりがない場合には引用符は必須であり、それがある場合には引用符は任意である。また、引用符を用いていても、仮にその引用符をはずした場合統語的に変化がなければ、事実レベルでは引用であつても統語的引用とは見なせず、逆に文意の差等の変化が生じれば、それは統語的引用の問題として扱うべきものと判断できる。つまり、統語的引用のレベルでは、どのような構文的環境のもとに引用符が現れ

ているかで、引用符の扱いに差が生じることになる。

引用符の本質的機能は引用されたコトバをアイコン記号として提示することだが、実際に引用符を使用するか否かは、「その引用されたコトバをリアルなものとして感じ示そうとする意識の強弱（もしくは、有無）（五八六頁）」により左右される。そのため、発話動詞で引かれる「話されたコトバ」の方が、思考動詞で引かれる「思ったコトバ（心内語）」より引用符を付されることが多いのは確かだが、あくまでも書き手の意識に委ねられるだけに絶対的ではない。また、「もとの発話がかなり変容されて引かれるような場合にも、しばしばカギカッコを付けることは避けられる（五八七頁）」とあるが、これも一概には言えない。引用者が元の発話を意図的に改変して新たな発話の効果めをねらう場合、

⑩ 花子「私は本当にそのようなことは存じません。」

太郎「花子は「マジでそんなこと知らねえ」ってさ。」

のように引用符を付して、花子がぞんざいな言い方をしたふうを装うこともある。つまり、「リアルさ」にも両面があり、事実を正確に再現するリアルさと、再現の場でいかに事実らしく見せるかというリアルさの両方を引用符は表し得ると筆者は考える。

四 「場の二重性」と「アイコン記号」

さて、ここで新たに「場の二重性」という観点から引用の問題を考え直してみたい。砂川有里子氏は、砂川（一九八七）等で引用文の三類型を提示し、「場の二重性」という概念を用いてそれらの差異を記述して見せている。砂川氏の言う引用文の三つの類

型とは、「主格補語」が／は＋「引用句」と＋「引用動詞」の連なりとして表現される、

I 太郎は旅行に行こうと私を誘ってくれた。〈発言〉

II 私は旅行に行こうと思います。〈思考〉

III 昨夜大雨が降ったと見える。(ムード的)

のような三タイプである。IIIの文末は他に「～と聞く・～と言う・～と思われる」等があり、話し手の心的なかかわり方を表す。IとIIの構文上の大きな違いは、IIIでは主格補語が存在し得ない点である。また、文末を過去・否定・疑問形にも変えられないことからムードの助動詞とのつながりが感じられ、実際、IIIを「昨夜大雨が降ったらしい。」にしても意味的に大差はない。IとIIの構文上の違いは、IIの主格補語が常に話し手(疑問文の時は聞き手)に限定されることである。IIIほどではないが、ムード助動詞的な用法に多少近づいていると言える。これらの違いを「場の二重性」で説明するとどうなるだろうか。

引用するということは、ある発言の場ないしは思考の場で成立した発言や思考を、それとは別の発言の場において再現するということである。したがって引用文にはその文の発言の場と引用句に表された内容が発言ないしは思考される場といった二つの場がかかわってくることになる。

(砂川(一九八九) 三六二頁)

引用文は、元の文の発言の場と当の引用文の発言の場という二つの場の、前者を後者の中に入れ子型に取り込むという形の二重性によって成り立っている文であると言える。

(砂川(一九八七) 八四～八五頁)

Iの典型的な引用文はこの定義通りで、太郎が「旅行に行こう」と発言した場を、私が「～と誘ってくれた」と発言した場で包み込む二重構造を成している。IIの場合は、私が「旅行に行こう」と思考した場を、私が「～と思います」と発言する場で包み込むではいるが、前者・後者の主体と成立時点が同一であるため、「二つの場が一つに重なり合うような力が働いている」(砂川(一九八七) 八八頁)と見ることができ。ところがIIIは、「昨夜大雨が降った」と「～と見える」とが入れ子型の二重の場を形成しているとは見られず、命題内容(前者)を話し手のムード(後者)とともに伝える、一般の助動詞文と同じ単層型の構造になっていると思われる。

この「場の二重性」の考え方は、二節で説明した藤田氏の「アイコン記号」とも矛盾しない。二重の場の存在を前提にしてこそ、「旅行に行こう」等の引用されたコトバがアイコン記号であるということが意味を持つからである。また、IIIが単層型であることは、所与と見なせるコトバの存在を想定しにくくさせるため、「昨夜大雨が降った」をアイコン記号と見なすことも難しくなる。アイコン記号でなければ、IIIはもはや引用表現とは言えない。⁽⁶⁾

一方、引用の助動詞「と」が導く様々なレベルの表現と引用表現とを区別する一つの目安として「場の二重性」を位置づけることもできる。例えば、音象徴語とも言われる擬声語・擬態語は、その成り立ちが対象との類似性に基づくという意味でアイコン記号と言える。

⑫ 子供たちが「ブー」と文句を言っている。

⑬ 子供たちが「いやだ」と文句を言っている。

例⑫は擬声語、⑬は引用と見なすが一般的だが、両者には明らかな連続性がある。しかし、例⑬には二重の場が存在し、元の発話の場を別の発話の場でリアルに再現しているのに対し、⑫にはもはや二重の場はないと思われる。「ブー」はその成り立ちから言えばアイコン記号だが、例⑫では「文句を言っている」子供たちの声をリアルに再現しているとは言い難い。いろいろな文句の声を一般化・抽象化して「ブー」に集約して示しただけで、使用上はシンボル記号に過ぎないのである。擬声語・擬態語には実はこのような用いられ方が多く、犬の鳴き声なら「ワンワン」、小雨の音なら「しとしと」とお決まりの形式を当てはめることで、実際には多様なはずの描写の可能性を閉ざしてしまっている。いったん成立し認知された音象徴語は、それ故に逆に、類似の場の最大公約数的なラベルづけとして使用されることになり、個々の場の忠実な再現を目指す引用とはおのずから異なる性格を帯びるようになるのである。ちなみに、先の「ブー」が実際の音声として、

⑭ 子供たちが「ブー」と唇を鳴らして文句を言っている。
のように再現されている場合には本来的なアイコン記号であり、場の二重性も保たれている。

五 「引用」と「話法」の位置づけ

日本語の引用研究の中で、「引用」と「話法」はしばしば混同

されており、引用研究と言いながら、専ら話法の転換のみに着目した研究も見られるようである。ここでは、まず先行研究におけるとらえ方の違いに触れながら、両者の位置づけを探ってみたい。

藤田氏の引用研究は「話法（パラダイグマティックな対立の問題）＝ヨコの引用論」にも展開している。その特徴は、「話法」を文法論的な対立の問題として扱うべきものとして狭く限定し、それを超える語用論的な変容・非変容の現象は「話し手投写」と呼ばれる話し手の解釈の問題として扱うという点である。ここで言う文法論的な対立の問題としての「話法」とは、具体的には直接話法と間接話法の対立であり、直接・間接どちらに読まれるかは、「と」引用句内に引用されたコトバが、「形式として顕在であろうとなかろうと、伝達のモードを帯びたものと読まれるか否かによって決まる（二五〇頁）」としている。つまり、終助詞・感動詞類が顕在していれば一義的に直接話法に決まり、顕在していなくても伝達のモードがあると考えて読むなら直接話法となるが、逆に伝達のモードが許容されない環境なら間接話法に決まるというわけである。藤田氏は「引用」の本質をアイコン記号ととらえ、文法論で扱える引用に様々な有りようを認めた（例⑤⑥⑨）上で、中でも典型的な「と」構文を中心に「引用のシンタクス」を分析したが、「話法」に関しては「と」引用句内部の変容現象のみに限定し、文法的カテゴリーとして直接・間接の対立をとらえる。

それに対し砂川氏は、前節で述べたように「引用」を場の二重性に基づいて規定しているにもかかわらず、実際にはその考察対

象を「と」形式のみに限定している。その一方で「話法」を「発言内容や思考内容を伝達する際の表現方式（砂川（一九八九）三五八頁）」としてかなり広い領域にかかわる問題ととらえ、引用句はもちろんのこと、「と」形式の名詞句や「と」ように「等の副詞的修飾語をも話法の中で取り扱うことを提案している。

さらに、話し手（伝達者・引用者）の生成・創造の所産として引用表現・話法をとらえ直そうとする立場もある。鎌田修氏は、一九八〇年代の初めから話法に関する論考を発表しているが、「引用句創造説」を含むこれまでの研究が鎌田（二〇〇〇）にまとめられている。その中で、「引用」と「話法」の違いについては次のように述べている。

「引用」とはある発話・思考の場で成立した（あるいは、成立するであろう）発話・思考を新たな発話・思考の場に取り込む行為である。そして、「話法」とはその行為を表現する言語的方法のことである。日本語の場合、引用は助詞「と」を伴って行われることもあれば、そうでないこともある。その判断はどのような話法形式が選択されるかによって決定される。（二七頁）

藤田氏の「アイコン記号」も砂川氏の「場の二重性」も、その根底には「再現」という見方があり、直接話法は元の発話に忠実な再現、間接話法は伝達の場に応じてある種の調整を受けた、「いわば写像の軸がずれたヴァリアント（藤田（二〇〇〇）一八二頁）」としての再現ととらえていた。しかし鎌田氏は、「直接引用とい

えども、元の発話・思考とは何らかの関係を保ちつつも、「再現」という域を越えた新たな場における新たな発話・思考を「表現」していると考えなければ説明のつかない言語事実がある（鎌田（二〇〇〇）一八頁）」という見方に立つため、「と」をとらない表現形式や伝聞表現、文体的差異なども含めて、砂川氏よりさらに広い領域を話法の問題として射程範囲におくのである。以上、個々の立場を紹介したが、三者それぞれの、話法で扱う範囲を具体例で示せば次のようになる。

⑭ 花子は私の方が生徒会長に ふさわしいわ／ふさわしいと主張した。

⑮ 花子は私の方が生徒会長にふさわしいことを主張した。

⑯ 母に本当のことを言っていにかどうか迷っている。

⑰ 来週までに提出する書類を整えておくように命じた。

⑱ 友人の心遣いがとてもありがたく感じられた。

⑲ 友人の心遣いに感謝を感じた。

⑳ 先生が直接先方のご両親に会ってくださったそうだ。

藤田氏は、例⑭伝達のモード「わよ」の有無に基づく直接・間接の対立のみを「話法」と見なし、砂川氏は、例⑭から名詞句的な⑮⑯、副詞的修飾語の⑰⑱までを「話法」で扱う。鎌田氏はこれらのほか、例⑲のような、対格補語として取り込まれた感情名詞や⑳の伝聞表現、さらには、三節の最後に挙げた例⑪のようなものまで「話法」という範疇で統括できると考えている。鎌田氏は、直接引用と間接引用を両極に位置づけ、その間に「準直接引用・準間接引用」のような中間段階を置くとらえ方をしているの

だが、一方で、例⑪に代表されるような「引用句創造説」の提案を大きな特色としている。⁽⁸⁾

また、三者の言う引用の範囲はどうかというと、最も広く引用をとらえているのは、引用と話法をそれぞれ「取り込む行為」とその「言語的方法」と見なす鎌田氏で、最も狭いのは「く」と形式に限る砂川氏である。藤田氏はその中間に位置し、アイコン記号と見なせるものであれば、「く」と形式に限らず引用ととらえていると考えられる。

三者のうち、藤田氏は統語論的引用分析を目指し、鎌田氏は談話分析を意識した語用論的分析を行っているという意味で、立場は全く異なる。砂川氏は、引用に関しては統語論的な視点で名詞句や述語動詞の分析を行っているが、その本質と位置づける「場の二重性」自体は多分に語用論的概念であるし、また砂川氏の示す話法の領域は、その「場の二重性」を超えたところにも展開されているように思われる。

六 おわりに

さて、日本語学の立場から引用と話法を論じるためには、どのようなとらえ方をするのが最も有効であろうか。諸説を検討した結果、筆者は現在次のように考えている。

まず、「引用」を日本語学的にとらえる場合、一般的・常識的引用との差異を明確にするために、その表現が事実の有無にかかわらず、まず「アイコン記号」であることが条件となる。これは、統語論的に引用をとらえる藤田氏の見方を引き継いだものであ

る。一方、「話法」については、文法的カテゴリーとして直接話法・間接話法の規則的対立を規定するより、前掲例⑮・⑯や⑪等までをも視野に置いた、かなり広範囲の領域を記述対象とした方が意義深いと考えている。つまり、話法はアイコン記号はもちろん、そうでないもの（シンボル記号）をも対象とし、事実との対応関係を手がかりに伝達者の表現意図を重視しながら、伝達の際の述べ方を広く記述する概念となる。この立場では、「話法」が「引用」を包摂する⁹と見なすわけだが、これにより、例⑭は引用・話法の問題、例⑮は話法の問題として扱えることになり、類似の意味を表しながら言語記号としては質の異なるこれらの表現群を、連続的に記述し位置づけることが可能となる。もちろん、何を目的として引用・話法を研究するかにもよるが、日本語学の今後の展開の方向性から見ても、筆者の考える「話法」の根本にある語用論的な視点を抜きにすることはできないのではないだろうか。

本稿では、日本語学において引用をいかにとらえるかという観点から幾つかのポイントを絞って論じてきた。引用の本質や原理についてはいささか考察することができたと思われるが、紙数の関係から、引用と話法の位置づけやその有効性に関する具体的な問題については述べる余裕がなかった。この点にも触れた別稿を用意しているので、そちらをご参照いただければ幸いである。

注(1) 今後本稿で、特に断りなく藤田氏の論考を引く際には、最新の考
えが反映されている藤田(二〇〇〇)の記述に基づくものとする。

(2) 実際、文法論では、表現の対象が実際に存在するかどうかや、表現内容が事実世界で真か否かなどの点は問題にならない。藤田も「ユニコーンは存在する」。「九い三角形」の例が統語的に見れば支障がないことに言及している。(一六頁)

(3) 例えば、「リンゴ」という言語記号で示さずに、りんごの実物を差し出して見せることを言う。藤田(二〇〇〇)の四一―四六頁に詳しい。

(4) 統語的引用を明示する構造上の手がかりは引用の助詞「と」だけではないが、最も代表的なものとして挙げる。ただ、引用の助詞「と」は用法が広く、実際には引用と見なせないような用法も多い。詳細は山崎誠(一九九三)等を参照。

(5) これらの例文は砂川(一九八七)(一九八八)による。

(6) 藤田氏は砂川氏の引用文の三類型を、「引用構文の構造が、引用表現としての本質を失って、引用表現ならざる辞的形式へと転化していく段階として理解したい(三八九頁)」とし、③はもろろんのこと②も辞的形式に入ると考える。なぜなら、②の「旅行に行く」は「と思います」と述べるその時点で同時に産出されるコトバに過ぎず、所与と見なせるものを再現したという本質的な性質(所与性)を喪失しているためである。砂川(一九八七)にも方向性の似た指摘があったが、それ以降むしろ①②の共通性の方が強調されてきたように思われる。この点も含め、「場の二重性」を再検討した詳細な考察が藤田(二〇〇一)にある。

(7) 「いかどうか」の位置づけには諸説ある。詳細は藤田(二〇〇〇)を参照。

(8) 藤田の立場ではこのようなものは語用論的な領域に属し、「話し

手投写」と呼ぶ、引用に際しての「話し手」(引用者)の様々な表現意図・解釈を介した変容現象として位置づけられるという。詳細は藤田(一九九六・二〇〇〇)を参照。

(9) 松本(二〇〇二)四・五節を参照。

参考文献

鎌田 修(二〇〇〇)『日本語の引用』ひつじ書房

砂川有里子(一九八七)『引用文の構造と機能——引用文の三つの類型について——』(『文藝言語研究 言語編』一三

筑波大学文芸・言語学系)

(一九八八)『引用文における場の二重性について』(『日本語学』七一九)

(一九八九)『引用と話法』(北原保雄編『講座 日本語と日本語教育 4 明治書院』)

藤田 保幸(一九九六)『引用論における所謂「準間接引用句」の解消』(『語文』六五)

(二〇〇〇)『国語引用構文の研究』和泉書院

(二〇〇二)『引用形式の複合辞化——ムード的助動詞への転化の場合——』(『日本近代語研究』三 ひつじ書房)

松本 正恵(二〇〇二)『引用と話法に関する覚書』(『早稲田大学文学研究科紀要』四七)

山崎 誠(一九九三)『引用の助詞「と」を再整理する』(『国立国語研究所報告』一〇五 研究報告集一四二)